

# さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第524号 2025年11月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

## 問いを創出し、

## 追究することの意味とは

伴野 彰宣

「先生、何のために問いを追究するのですか」ある児童の発言に、ハッとさせられた。もちろん教師には、「問いを創出し、追究すること」に明確な学習目的がある。しかし、いざ子どもの立場からすると、「やらされている学習」として受け止められてしまうことがある。

特に文学教材では、「まず問いをつくること」が既定路線のように感じている子もいる。だからこそ、「何のために」「この教材で」問いをつくるのか、その意義を教師も子どもも明確に説明できる必要がある。私は、問いを追究する意味や価値を子ども自身が自覚す

る学びの先に、真に言葉の学びを自覚する姿があると考える。

先日、六年生の教材『やまなし』の実践を行った。解釈の難しい文学教材だからこそ、自分なりの解釈をつくる上で、「問いを追究する学習過程」が重要になる。前教材『いちばん大事なものは』では、「一番大事にしている生き方や考え方」について、対話を通して考えを広げる学習を行った。しかし十分に自分の考えをもつには至らない子どもが多かった。この時期の子どもたちは、進路や受験、卒業を控え、自分自身の生き方や考え方に関心を高めつつあった。

そこで『やまなし』の単元導入

では、宮沢賢治の生き方や考え方が現代の人々に影響を与えていることを、ブックトークを通して紹介した。その中で、「何のために学びたいのか」と問うことで、「宮沢賢治の思いを受け取ること」「そのために、問いを創出すること」、さらには「自身の生き方を見つめ直すこと」が結びつき、子どもたちの課題意識が醸成されていた。単元展開では、「宮沢賢治の思いを受け取る」という学習目的を明確にしながらい問いを追究すること、豊かな解釈を生み出す姿が見られた。単元終末では、「仲間と共に学んだ『やまなし』を通して、宮沢賢治のように、他者の思いに寄り添い、尊重できる大人になりたい」と語る子どもの姿も見られた。

このように、教師の「ねらい」と子どもの「願い」とを、学習目的を軸に関係付けることで、自然な思考の流れの中で、問いが創出されていく。そうして創られた問いを自分ごととして追究するからこそ、子どもたちは真に言葉の学びを自覚するのである。今後、すべての子どもが学びの意味や価値を自信を持って語ることができる国語科授業を目指し、日々研鑽を重ねていきたい。

(滋賀大学教育学部附属小学校)

## さざなみ

▼文章指導においては、取材から構成、記述・推敲・清書へと手順に沿って丁寧に取り組んできた。しかし、書くことが苦手な子どもにとつては、限られた授業時間で一つの作品を仕上げることは、相当の努力を要する。▼「光村図書1号」を読んだ。紹介されていたのは、鈴木秀樹先生による6年生の実践授業「構成を考えて、提案する文書を書く」である。特に印象に残ったのは、「お助けAI」を活用して文章を生成する場面であった。▼AIは、文提案文のタイトル(オンラインゲーム)・そのテーマを選んだ理由・調べてわかったこと等について問いかけながら、子どもの考えを引き出していく。こうして得られた情報をもとに、AIが提案文を自動生成するという内容だった。▼レポートでは、「AIが作った文章を、子どもが納得するまで修正する」また、「AIの得意とする効果率的に文章を整理してまとめる技術に委ねる」といった学習活動も紹介されていた。▼AIに生成させた文章を修正する活動は極めて興味深い。一方で、これまで、手間と時間をかけてきた従来の丁寧な指導との違いはどこにあるのか、AIとの関わり方や活用の在り方が、今後の課題として問われているの

(吉永幸司)

## 『くじらぐも』の実践

川部 長人

運動会が終わり、『くじらぐも』の実践がスタートした。今回の単元では「おもいうかべながら読もう」というテーマで学習を進めている。子どもたちが『くじらぐも』の話を読んで、「いいな」や「すきだな」と思ったところをたくさん見つける学習を通して、お話の感想につながるような学習にしていきたいと思っている。今回の学習では、特に「音読」と「視写」の指導を中心に学習を進めたいと思っている。今回の原稿では「視写」の指導を中心に書きたいと思う。

低学年では「視写」の学習を大切にしたいと思っている。なぜ、視写の指導を大切にしたいと思っているかというと、学生のころにさざなみにいるY先生の授業を参観したことがきっかけである。当時、A小学校の一年生を担当されていたが、「一年生でもこれだけたくさん書けるんだ」と子どもたちの姿に感激したからである。Y先生に授業後、国語の学習で何を大切にされているか質問したところ、「視写」の学習を大切にしているということ、子どもたちの成果物を見せながら説明してもらったことがある。そこから見よう見まねで、「視写」の学習に取り組んでいるが、私自身「視写」をすることによって、子どもたちが

書かれている文章にこだわって話ができるようになってきたということが大きな手ごたえとしてある。

今回の『くじらぐも』の実践で、視写をすることで「書かれている文章にこだわって話をする子ども」の姿を紹介する。『くじらぐも』の話の中で、子どもたちが「天までとどけ、一、二、三。」と三回言う場面がある。発問として「天までとどけ、一、二、三と三回出てくるが、音読の仕方はどれも同じでいいかな？」と聞いてみた。すると、ほとんどの子どもたちが「一回目、二回目、三回目と声をだんだん大きくしていく。」という答えが返ってきた。「なぜ大きくしていくの？」と聞いてみると、「一回目は三十センチ、二回目は五十センチ、三回目は空までとんだと書かれているから、跳が高さがどんどん高くなっていくから、それに合わせて、音読するときの声も大きくする。」という意見が出てきた。他の子どもたちもその子の意見に賛成で、「天までとどけ、一、二、三。」のところを工夫して音読することにつながった。

視写の学習を通して、他にも子どもたちにとってよい効果がたくさん出ている。今後も年間を通して視写の学習をすることで子どもたちがどう変わったか、子どもたちの成長が楽しみである。

(湖南市立菩提寺小学校)

## 『お手紙』の学習

井上 滉斗

運動会での大きな達成感を胸に、心身ともに一段と成長した二年生の子どもたちと、最近国語科「お手紙」の学習に取り組んだ。

この単元では、子どもたちは挿絵と音読で「がまくん」と「かえるくん」の気持ちを想像することから始めた。その後、本文の叙述から心情を表す言葉を探すことで、登場人物の気持ちをより深く読み解いた。この学習活動の中で見られた、子どもたちの学びが深まった様子を紹介したい。

手紙を書いたかえるくんががまくんの家に戻り、手紙を待つように声をかける場面。ここでは「かたつむりくんは、まだやって来ません。」という叙述が三度繰り返される。

子どもたちはこの繰り返し叙述から、かえるくんの「まだかな」という焦りの気持ちや、「早く手紙を読んでほしい」「この手紙をもらったがまくんを幸せな気持ちにしたい」という、かえるくんの強い願いを想像していった。

その次の時間、「かえるくんががまくんへのお手紙に込めた思い」について、再び叙述をもとに考えさせた。

ほとんどの子どもは、「がまくんが一度もお手紙をもらったこと

がない」という叙述に注目し、「がまくんに喜んでほしい」「がまくんを幸せな気持ちにしたい」「悲しい顔をしがまくんを笑顔にしたい」と、がまくんを思いやる気持ちを理由と共に捉えていった。

しかし、Yさんだけは異なる視点から考察を深めました。Yさんは、手紙の最後の場面「ぼくは、こう書いたんだ。『親愛なるがまくん。ぼくは、ぼくの親友であることをうれしく思っています。きみの親友、かえる』」の叙述に着目しました。Yさんの意見は以下の通りです。

「がまくんによるこんでほしい気持ちもあるけど、窓のときみにい、(かえるくんの書いたお手紙には)『親』っていう漢字が三回も出てきてる。『親』って漢字には、『とても』みたいな意味がある(実際には『親しい』)から、ただの友だちじゃなくて、『とても大好きな友だちだよ』って気持ちも込めていると思う。」

Yさんは、繰り返し表現と、以前の漢字学習で獲得した知識(「親」の多義性や用法)から、かえるくんががまくんを思う「友情の深さ」も考えており、私も含め、他の子どもたちもその読みの深さに驚かされた。

この日の学習は、どの子も学びが広がり、そして深まり「しあわせな気持ち」だったように思う。

(豊郷町立日栄小学校)

## 音読発表会を通して

山田 定子

「サラダでげんき」は、一年生の子ども達にとっては長い文章ではあるが、主人公のりっちゃんに、サラダ作りに協力する動物たちが次々と登場する楽しいお話である。そのため、どの子も、(次はどうなるかな)と興味を持って読み進めることができた。

初発の感想の中には、  
①ほかの動物や、学級のみんなだったから、サラダに何を入れるかな。  
②つづきのお話を考えてみたい。などがあつた。そこで、本文の学習後には、これらについても、自分なりに考えて、友だちと交流することになった。学習計画を立てる時、

「友だちといっしょに音読をして、自分の考えたお話も発表しよう。」ということ、音読発表会をするようになった。

毎時間の読みの学習は、次のように進めた。

- ①全文音読をする。
- ②本時の場面を視写し、音読する。
- ③小見出しをつける。(話の大体をつかむ。)
- ④登場人物の様子や会話を読みとる。(言葉をつけ加えたり、言いかえたりする。)
- ⑤音読する。(どのように読めばいいか考えながら読む。)
- ⑥りっちゃんに一言手紙を書く。
- ⑦学習のまとめをする。(ノート

の整理とふりかえり)

この学習をくり返していくと、次々に登場人物たちの行動や会話を、人物の特徴と関連づけて読みとることができた。また、音読も、場面が進むにつれて、大きな声ではつきりと、工夫しながら読むようになってきた。

また、他の動物だったら、何を教えてあげるかを考えて手紙を書き、友だちと交流した。いろいろな話が出てきて、どの子も興味を持ってどんどん書き進めることができた。

音読発表会では、グループで、どの場面を読むかを決め、さらに、自分の書いた手紙もあわせて発表した。よく練習した成果が出て、どの子も自信を持って発表することができた。校長先生にも聞いていただき、おほめの言葉をいただき、子どもたちはとてもうれしそうであつた。

## 【りっちゃんへの手紙の例】

りっちゃんへ

サラダには、たまごを入れるといいですよ。こえが大きくなるし、げん気いっぱいになりますよ。にわとりさんみたいにね。

◎サラダに、くりを入れるといいですよ。ぴよんぴよんジャンプがじょうずになりますよ。りすみたいだね。

音読発表会をめざして、自分たちで読みを工夫したり、お話をつけ加えたりして、楽しく活動しながら学習を進めることができた。今後も、「言葉への着目」「意欲」を大切にして、学習を進められるように工夫したい。

(東近江市立湖東第一小学校)

かえるくんと  
がまくんシリーズの  
おすすめカード

岡嶋 大輔

二年生「お手紙」(光村図書二年下)を扱った学習。児童の初発の感想には、このお話を素直に楽しんで読んでいるなと思わせるものが多くあつた。

単元の後半、その初発の感想にある「おもしろい」「かわいい」「やさしい」「友だち思い」といった感想の言葉を取り上げて授業を進めた。

「感想に『おもしろい』と書いた人が多かったけれど、どんなところがおもしろかったのですか。」と聞くと、

・かたつむりくんが、すぐやるぜ、と言っているのに、四日もかかっているところ。

・かえるくんがもどってきたときに、がまくんがお昼ねをしていたところ。

といったように、そういうええ読み語りをした時にも笑い声が聞こえてきたという場面がたくさん挙げられた。その中で、『おもしろい』以外に、『おもしろくて好き』『かわいくておもしろい』『なんでも、と思っておもしろい』といった感想の言葉があつたことも私から紹介した。児童の発言に「さし

絵のベッドも、かえるの形をしてかわいい」といったように挿絵に着目したものもあり、「お手紙」のおもしろさについてたくさんのおもしろい出し合うことができた。

「やさしい」「友だち思い」「ふたりは親友だな」と思ったところは、

・かえるくんが、いそいでがまくんに手紙を書こうとしたところ。  
・かえるくんが、何度も窓の外を見ているところ。  
・かえるくんが、がまくんにお手紙が来るよとほめてあげているところ。

・がまくんがお手紙をもらって、かえるくんがいつしよによるこんでいるところ。

等と、これもたくさん出された。このような、「おもしろいところ」「やさしいところ」「おすすめポイント」として、「かえるくんとがまくん」のシリーズについて「おすすめカード」を単元の最終に書くようにした。シリーズのお話は、朝や授業の時間に一話ずつ読み語りを聞き、おすすめポイントをメモするようにしていった。シリーズの内、一番のおすすめのお話を選び、そのお話について、「おすすめカード」を書くという流れ。読み語りの際、挿絵は大型モニターに映したところ、

抱えて投げ出すことと頭をい太田さん(仮名)は、シリーズの最終話「ひとりきり」を選んで、ちよつと頭をひねって次のように書いた。

「がまくんとかえるくんが、ぬれたサンドイッチをいつしよに食べべなと思っておすめです。」

なるほど、その場面は、このお話のクライマックス場面であり、大人でもジーンとくる場面である。「素敵なお話の素敵な場面を選んでね。先生もそう思ったよ。」と褒めた。他の児童も、「私は、クリスマスイブが好き。だってー。」と、休み時間になっても教えに来

てくれるのが嬉しい。

(野洲市立北野小学校)

三上 昌男

二年生の学習では、実際に本教材の紙コップ花火を作ること、体験を通しての筆者の工夫に気づいたり考えたりできるようにされ

図書資料で調べたことを「秘伝書」にまとめるために、どのような工夫があつて何ができているのかを一枚の情報カードに一つの食品について書き、書きためた情報

複合単元の授業づくりを構想する場合、単に二つの学習をつなげて行うだけではなく、それぞれの指導のねらいを一層効果的に実現できるように工夫することが求められる。そのためには、子どもが「読むこと」と「書くこと」を自らつなぐ学びの姿を引き出したい。

(滋賀県総合教育センター)

価規準を設定し、具体的な学習活動・学習形態・学習評価（教師によるもの児童自身の振り返り）を構想することは授業の基本中の基本。また、単元を渡って成果と課題を踏まえた見通しのある実践の歩みの大切さも改めて確認。

▼巻頭には、伴野彰宣様からの玉稿をいただきました。深謝。

(森邦博)